新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第四章（だいよんしょう）　仏法と社会（ぶっぽうとしゃかい）

出産（しゅっさん）

この「宝塔」は宝浄世界より涌現するなり。その宝浄世界の仏とは、事相の義をばしばらくこれを置く、証道・観心の時は母の胎内これなり。故に、父母は宝塔造作の番匠なり。

宝塔とは、我らが五輪・五大なり。しかるに、託胎の胎を宝浄世界と云う。故に、出胎するところを「涌現」と云うなり。およそ衆生の涌現は地輪より出現するなり。故に「従地涌出（地より涌出す）」と云うなり。

妙法の宝浄世界なれば、十界の衆生の胎内は皆こ

れ宝浄世界なり。蓮華の宝浄なれば、十界の胎内ことごとく無垢清浄の世界なり。妙法の地輪なれば、十界に亘るなり。蓮華の地なれば、清浄地なり。妙法の宝浄なれば、我らが身体は清浄の宝塔なり。妙法蓮華の涌出なれば、十界の出胎の産門、本来清浄の宝塔なり。

（095 御義口伝

出産 1110ページー8行）

なかんずく夫婦共に法華の持者なり。法華経流布あるべきたねをつぐところの玉の子出で生まれん。めでたく覚え候ぞ。色心二法をつぐ人なり。いかでかおそなわり候べき。とくとくこそうまれ候わんずれ。この薬をのませ給わば、疑いなかるべきなり。

闇なれども灯入りぬれば明らかなり。濁水にも月入りぬればすめり。明らかなること、日月にすぎんや。浄きこと、蓮華にまさるべきや。法華経は日月と蓮華となり。故に妙法蓮華経と名づく。日蓮また日月と蓮華とのごと

くなり。信心の水すまば、利生の月、必ず応を垂れ、守護し給うべし。とくとくうまれ候べし。法華経に云わく「かくのごとき妙法」。また云わく「安楽にして福子を産まん」云々。

口伝相承のことは、この弁公にくわしく申しふくめて候。則ち如来の使いなるべし。返す返すも信心候べし。

（189 四条金吾女房御書 出産 1510ページ-8行）

信者のなかでも、ときにあなた方夫婦はともに法華経を受持しています。したがって、お二人の間には法華経が流布していく種を継ぐところの玉のようなお子さんが生まれることでしょう。まことにめでたいことです。法華経の持者であるあなた方お二人の色心の二法（生命）を継ぐ人です。どうして出産が遅れたり（難産の意）することがありましょうか。（中略）信心という水が澄むならば、利生の月（人びとを利益することは間違いないのです。したがって、かならず安産されるでしょう。法華経方便品には「是くの如き妙法」とあり、また法師功徳品には「安楽にして福子を産まん」と

説(と)かれています。符(ふ)をいただく心構(こころがま)えについては、この弁公(べんこう)（日昭(にっしょう)）に詳(くわ)しく申(もう)しふくめてあります。すなわち弁公(べんこう)は如来(にょらい)の使(つか)いです。くれぐれも信心(しんじん)を起(お)こしていきなさい。

今(いま)の月満御前(つきまろごぜん)は、うまれ給(たま)いてうぶごえに南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)と唱(となな)え給(たも)うか。

（190 月満御前御書(つきまろごぜんごしょ)

出産(しゅっさん) 1512ページー9行）

定(さだ)めて十羅刹女(じゅうらせつにょ)は寄(よ)り合(あ)ってうぶ水(みず)をなで養(やしな)い給(たも)うらん。あらめでたや、あらめでたや。御悦(おんよろこ)び推量(すいりょうもう)申(もう)し候(そうろう)。

（190月満御前御書(つきまろごぜんごしょ)

出産(しゅっさん)1512ページ-12行）

それにつきても、母の御恩忘れがたし。胎内に九月の間の苦しみ、腹は鼓をはれるがごとく、頸は針をさげたるがごとし。気は出ずるより外に入ることなく、色は枯れたる草のごとし。臥せば腹もさけぬべし。坐すれば五体やすからず。かくのごとくして産も既に近づきて、腰はやぶれてきれぬべく、眼はぬけて天に昇るかとおぼゆ。かかる敵をうみ落としなば、大地にもふみつけ、腹をもさきて捨つべきぞかし。さはなくして、我が苦を忍んで急ぎいだきあげて血をねぶり、不浄をすすぎて胸にかきつけ、懐き

抱

かかえて三箇年が間慇懃に養う。母の乳をのむこと、一百八十斛三升五合なり。この乳のあたいは、一合なりとも三千大千世界にかえぬべし。されば、乳一升のあたいを撿えて候えば、米に当つれば一万一千八百五十斛五升、稲には二万一千七百束に余り、布には三千三百七十段なり。いかにいわんや、一百八十斛三升五合のあたいをや。

（401刑部左衛門尉女房御返事

出産2072ページ－12行）

これら（親が子を守る姿）をみるにつけても、母の恩は忘れがたいものです。子が胎内にいる九か月の間の母親の苦しみというものは、腹は鼓をはったようであり、頸は針をさげたようなものです。呼吸ははく一方で吸いこめず、顔色は悪く、枯れ草のようになってしまいます。ふせれば腹が裂けそうに思われ、座れば体中が苦しくなります。このようにして、お産が近づけば、あまりの痛さに腰は破れて切れてしまいそうであり、眼はぬけて天に昇るかと思われます。このような苦しい目にあわせる敵を産み落としたならば大地にふみつけ、腹をさいて捨ててもかまわないであろうに、そう

はせずに、自分の苦しみを忍んで、急いで抱きあげて、血をぬぐいとり、きたないものを洗いおとし、胸にかきあげ抱きかかえて三か年の間心をこめて育てるのです。その間に、子が母の乳を飲む量は百八十石三升五合あまりになります。この乳の値はたとえ一合といえども全世界にも値するほど貴重なものです。そこで乳一升の値をかんがえでみるならば、米に当てはめれば一万一千八百五十石五升、稲ならば二万一千七百束よりも多く、布ならば三千三百七十段となります。まして百八十石三升五合の値はあまりに膨大なものなのです。